様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月 20 日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０４０１０５１
研究課題名（和文）中国における象徴資本としての宗教実践に関する調査研究

研究課題名（英文） Field Study on Religious Practices as Symbolic Capital in China

研究代表者
佐々木　伸一（SASAKI　SHINICHI）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：３０１７５３７７

研究成果の概要（和文）：本研究は、1990 年代以降中国各地において顕著に見られる宗教復興の諸状況について人類学的なフィールド調査を行い、そこで得られた民族誌的資料をもとに、宗教を「象徴資本」として活用する国家や地方エリートの政策的側面と、それに対する宗教、とりわけ民俗宗教の職能者や信者たちとの複雑多岐にわたる相互作用によって構築される側面に焦点をあてつつ分析を行った。その結果、中国における宗教実践構築の諸相、及び宗教の象徴資本化の歴史性や政治性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study is intended to investigate revival of religions in China since 1990's, focusing on the political aspect of situations which the popular religions are drawn on as a "symbolic capital" by the state policies and the socially constructed aspect of the interaction among the state, local elites, specialists and lay believers over the capitalization of religious symbols . The context analysis of ethnographic data which were obtained through a series of intensive fieldworks has shown not only the complexity of social construction practiced by the actors, but also historical and political nature of the social phenomena which are produced by the capitalization of religious symbols.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	2,900,000	870,000	3,770,000
２００９年度	2,700,000	810,000	3,510,000
２０１０年度	2,800,000	840,000	3,640,000
２０１１年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
総　計	11,400,000	3,420,000	14,820,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：中国、宗教実践、象徴資本、状況構築、近代化

１．研究開始当初の背景

宗教をめぐる人類学的な研究は、これまで社会的機能や象徴的意味の解読に焦点が当てられてきたが、現代中国の宗教現象を捉えるためには、経済の市場経済化や政府の宗教政策の影響力を軽んじることはできない。こうした関心のなかで、我々は前回の科研「中国東南部における市場経済化に関する調査研究」（2003～2006）において、中国の市場経済化政策が宗教復興を導いてきた側面について明らかにしてきた。そして、そのなかで中国において宗教が、政府による政策や民衆による利権主張の資本となっている側面を目の当たりにすることができ、そうした現

状を「象徴資本」という概念から解読する作業が急務となった。

２．研究の目的

本研究は、宗教復興が進む中国で 1990 年代以降に顕著になった、宗教を「象徴資本」として活用する政策的側面と、それに対する宗教、とりわけ民俗宗教との複雑多岐にわたる関係性のなかで構築される「諸状況」を主な研究対象とする。また、現政権の宗教政策は、清末から続くモダニティの推進過程の延長線上にあり、現在見られる「諸状況」は過去にも遡及される。このため本研究では、宗教実践のなかで創出される「諸状況」を、「状況的な社会構築」と把握し、民国期以降における「諸状況」と対比しながら、人々が時々の政策をどのように考え、どう対応し、何を実行して、その結果どうなったかの事例を積み上げる作業を通して、中国における宗教実践構築の諸相を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

以上の研究目的を遂行するために、中国の、（1）東南部経済先進地域の宗教実践の様態、（2）経済的後発地域の宗教実践の様態、（3）現政権の宗教政策と実施状況、（4）清末から民国期、現在に至る宗教政策とそれに対する宗教実践の状況、この４点を調査対象とし、文化人類学的な現地調査を中心に実施、対象とした調査地に赴いての聞き取り調査と文献などの史・資料蒐集と解読、またこれら多様な情報の関連性などの比較検討のため、年１回合宿形式での研究会を実施した。

４．研究成果

本研究では、研究代表・分担者が民俗宗教領域を分けて担当し（代表佐々木伸一：民間職能者一般、分担者渡邊欣雄：風水並びに祖先祭祀関連、池上良正・黄強：寺廟での道教・仏教関係の儀礼と死者供養、志賀市子：中国南部で主に展開されている善堂活動や義塚など)、それぞれの宗教実践を対比しながら、実態の解明を進めてきた。その結果、それぞれの領域で以下のような事象を明らかにすることができた。

（1）渡邊は研究協力者河合とともに、北京市、広東省汕頭市、梅州市、湛江市、広西省玉林市、雲南省昆明市、紅河市で祖先崇拝、風水、および関連する民俗宗教の調査を実施した。その結果明らかとなったのは、同じ中国においても国家の民俗宗教に対する政策と態度には偏差があるということであった。共通していたのは、漢族の伝統性を強調するため、儒教に対する態度はすでに緩和させており、孔子廟を各地で建設し、文化財として保護していることであった。北京では実践こそされなかったが、儒教を国家教育のための象徴資本とし、オリンピックの際に朗読する計画すらあった。だが、風水および神々の信仰については地方政府について対応が異なっていた。とはいえ、それらについても全般として、政治的に無害であると判断され、国民国家の伝統性という言説に利するものであるなら、それを許容する状況が加速されており、儒教とつながる先祖祭祀においては特に、また風水についてもこれが当てはまるといえよう。

一方で、広東省東部の梅州市や潮州市では、客家文化なるものを構築するために、民俗宗教、とりわけ媽祖、三山国王など台湾や東南アジアの華人社会でも信仰されている神の信仰を推進しており、それを象徴資本とすることで華僑投資の呼び込みを図っていた。しかし、広西省と雲南省は宗教ではなく食や芸能を客家文化の象徴資本として利用することで、外資や観光による経済収益を図る政策を推進していた。

（2）池上と黄は、北京市、天津市、上海市、江蘇省南京市、浙江省杭州市、普陀山、安徽省九華山、江西省赣州市、陝西省西安市、四川省成都市、重慶市にて共同調査を行い、各地の仏教寺院において死者供養的な儀礼や実践を精査した。

これらの儀礼や実践の多くは文化大革命のなかでその大半が消滅した。それを支えてきた僧侶が寺院から追い出されたからである。改革開放後に多くの寺院が順々に再興されていくが、その再興は宗教としての再興ではなく、国家重要文物としての建築物の再建整備であった。そのプロセスに僧侶は加わることはなかったが、再建された寺院に徐々に僧侶が集まるようになり、信仰の場が再開されると、参拝が始まり信者が参集し、寺院は徐々に本格的な宗教実践を始めるようになる。ただし、これを行うためには職能者の教育が必要で、そのための学習機関である仏学院などが整備されていく。仏教については日本から教えに行っている。

こういった状況の中で、水陸法会などに代表される「施餓鬼」が催されるようになり、それと合わせるかのように収益事業として墓や納骨堂の建設が、外資をもとに進められていく。

中国寺院における死者儀礼の特徴は、無主孤魂と呼ばれるような不幸な死者を含む一切の衆生に無遮平等の供養をする功徳と、施主の現世での安穏と祖先を含む身近な死者の後生善処（極楽往生）の二種類を、双方もつことである。これは、かつて日本を含む東アジア全般に見られた動態的な「救済システム」であり、中国において脈々と生きている死者供養のシステムである。こうした「救済システム」は、渡邊の報告のように、国家が

政治的な権益や経済的な収益を得る象徴資本とすることがあり、例えば九華山はそれにより莫大な観光収入を得ている。また、地域によっては政府が宗教を政治経済的な利権を追求する資源とすることはないが、むしろ寺院が「自養」のための資金集めの手段とすることで、救済システムを象徴資本化しているといえよう。

（３）志賀は、広東省広州市、汕頭市、梅州市、茂名市、山東省済南市、青島市、台湾高雄市、花蓮市にて、善堂および各地の廟や道教施設において調査をおこなった。

善堂による無縁仏の埋葬や祭祀に関する調査では、池上と黄の報告にみるように、政府ではなく、民間や宗教職能者における象徴資本の活用が、施設の復興や神々の命名に影響をもたらしてきたことが明らかとなった。例えば善堂は、改革開放後に潮汕地域にて復興したが、その要因は善堂と関わる大峰祖師信仰が、タイの潮汕華僑の間でエスニック・シンボルとされていたからであり、それを象徴資本としてタイの華僑と潮汕の民間人・宗教職能者が資金を提供することで善堂の復興を導くことができた。

また、潮汕地域や台湾の廟に祀られている神々は将軍、元帥、義民などの名称がついているパターンが多くみられるが、これも彼らの宗教施設が「淫祠」ではなく正統な宗教であることを世に知らしめ、彼らの信仰を存続させるための知恵であることが分かった。

すなわち、将軍、元帥、義民といった名称およびそれに付随する記憶や物語を地方エリートが象徴資本として利用することで、無縁仏の信仰の持続が図られてきたことを調査により解明した。

（４）佐々木は、山西省、江蘇省、江西省、湖北省、湖南省の各地において巫者を主としながら民間の宗教的職能者の調査を実施した。その結果、①江蘇省の塩城と淮安のあたりが南北の巫術実践を分ける境界線になっており「過陰」と「動物神・仙」という両要素が混在していること、②ただし南北境界線で巫術実践が完全に区分できるわけではなく、北方の山西省にも「過陰」が見られること、③湖南省では劃水の術者が多数を占めるものの、シャーマン系術者も一部でみられること、が明らかになった。

これにより、これまでの知見と合わせたものであるが、中国の漢族系シャーマン的職能者の在り方について、見取り図を描くことに成功した。

政府とのかかわりで見ると、巫術は「迷信」として扱われているが、「絞かい子」という託宣の儀礼も見いだされるなど、公的な文脈の中では象徴資本として利用されない宗教実践であっても、民間の中ではそれが価値を持つ、言い換えれば民衆の間における象徴資本として、また公的なそれと比べれば微々たるものだが経済資本としても有効性を持ち、中国で脈々と生き続けていることを広域調査から確認することができた。

以上の各研究者の研究から、まず宗教実践の状況的構築性について理解を進めることができた。一般に宗教は長い歴史の中で形作られており、その生成プロセスの実態的な詳細を辿ることは難しく、またその存立にかかわるような事象については、その宗教の権威が高ければ、それが事実であろうとも否定あるいはうやむやにされてしまう。

中国の現在の宗教は、その権威性を現政権によって否定されてきたが、約 20 年という短期間の間での再生を遂げており、そのプロセスを何の気兼ねもなしに見通すことができるフィールドである。そこに見いだされたのは、宗教あるいは信仰というものは、政治と経済がらみの中で、ある意味、行き当たりばったりのような状況で再構築されてきたにもかかわらず、いったんその権威が認められると加速的な展開がみられるのである。寺廟が立派になると人々が参集し、それにより寺廟は経済的に豊かになり、さらに立派になる。するとさらに多くの人々が集まるというサイクルが繰り返されるのである。そこでは、その教義的な正当性などは、誰も気にも留めない。あくまでも現状が重要なのであり、成り立ちなどは構いもされないのである。

ただ、そういった事情の中でも忘れてならないのは、中国の民衆の中に流れ続けてきた信仰の諸相である。これが革命から、反右派闘争、文革を乗り越えて受け継がれているのである。それは儒教=祖先祭祀や風水、観音信仰、死者供養、善堂や義塚、シャーマンや算命などなどである。これらは政治によって利用されるもの、逆に一切否定されるものなど扱いはさまざまで、一概にその影響を語ることはできず、また本プロジェクトの中においてもその継承性について見解が分かれるものもあるが、錯綜する脈絡の中で、大きく見ればいずれもが一定の役割を果たしているといえよう。加えて、経済の加速度的な進展が、これを支えていることも見逃してはいけない事象である。

なお、現在の中国で生じている、宗教の象徴資本化は、現代中国のみならず、帝政期においても遡及できるものであり、民衆や宗教職能者は政策の在り方に応じて宗教実践を存続させていた。神々に将軍、元帥、義民などの名称が付会されているのはそうした歴史的な象徴操作の名残であった。

さて、象徴資本は、国家レベルにおいても政治的、経済的権益を得るために使われうる。だが、宗教の象徴資本化を論じる際には、宗教職能者や民間エリートによるポリティクスを別の角度からとらえていく作業も不可

欠であり、そうした草の根からの象徴資本の使用状況を考察するのが人類学的な課題となりうる。これは佐々木のシャーマン研究や、渡邊の風水研究において、かなり明らかになったが、今後のさらなる展開が待たれよう。また、中国の宗教実践を象徴資本という角度からすべてが説明できるわけではなく、象徴資本と経済資本の相互関係に収斂されない宗教実践も、中国宗教の状況構築を捉えていくうえで見据えていかねばならないことが、本科研の成果として明らかになった。ただ、これに関しては、そもそもブルデューの言うこういった概念設定自体が、全体的な事象把握において十全ではないとの結論に達しており、新たな概念枠を求めなければならないであろう。

最後に、本研究の価値であるが、少なくともこの 10 年の内外の研究成果の中で、中国の宗教関係の研究では、個別的な事象においては本研究を凌駕する、極めて高いレベルのものがあることは確かである。ただ中国全体を俯瞰し、それが、綿密なフィールドワークに基づくデータをもとにしたものは存在しない。そういった要素を考慮した場合、本研究は現在の中国の宗教実践に関する包括的な認識において、最高のレベルに位置する研究であり、本研究は今後の文化人類学や非教学的な宗教研究あるいは、中国を宗教関連で語るうえでの前提となると思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 22 件）

①黄強、「中国上海における死者の葬儀（下）－1949 年以降の変化－」『貿易風』中部大学国際関係学部論集、7 号、82-104、2012、無

②佐々木伸一、「中国調査ノート５：シャーマンの状況」『無差』、18 号、93-140、2011、無

③渡邊欣雄、「都市・村落・住居・墓地の風水－史資料からみる風水の実態」『比較日本学教育研究センター研究年報』、7 号、15-19、2011、無

④黄強、「中国上海市における死者葬儀（上）－清朝晩期から一九四九年までの死者葬儀を中心として－」『貿易風』中部大学、6 号、41-60、2011、無

⑤池上良正、「救済システムとしての「死者供養」の形成と展開」『文化』駒澤大学、29 号、5-31、2011、無

⑥池上良正、「身体の実践、人格の関係性としての「死者供養」」『国立歴史民俗学博物館研究報告』169 集、83-116、2011、無

⑦志賀市子、「先天道嶺南道脈的思想和実践――以広東清遠飛霞洞為例」『民俗曲芸』173 期、23-9、2011、有

⑧志賀市子、「神與鬼之間：粤東海陸豊地区的義塚信仰與其演変」『歴史人類学学刊』第 9 巻第２期、2011、39-64、有

⑨志賀市子、「広東における先天道の興隆と東南アジアへの展開―潮州からタイへの伝播と適応を中心に」『茨城キリスト教大学紀要』、44 号、11-28、2011、無

⑩渡邊欣雄、「持続可能な理論構築のために－六〇年代学部生からの現代人類学批判－」『社会人類学年報』、36 号、103-122、2010、有

⑪黄強、「市場経済化する宗教　－中国上海における道教の変遷と復興」『貿易風』、5 号、7-59、2010、有

⑫池上良正、「上海市における「死者供養仏教」の活性化―松隠禅寺の事例を中心に―」『文化』駒澤大学、28 号、29-54、2010、無

⑬志賀市子、「近代中國道教史研究の最前線－二〇〇九年に開催された二つのシンポジウムより－」『東方宗教』116 号、109-118、2010、無

⑭志賀市子、「地方道教之形成：広東地区扶鸞結社運動之興起與演変(1838－1953)」『道教研究学報:宗教、歴史與社會』2 号、231-267、2010、有

⑮志賀市子、「粤東海陸豊地区的義塚信仰與其演変」『宗教人類学』2 号、187-209、2010、有

⑯佐々木伸一、中国調査ノート４　蘇北・蘭州の民俗宗教事情、無差 16 号、13-49, 2009、無

⑰渡邊欣雄、「市場経済化する中国文化」『貿易風』中部大学国際関係学部論集、４号、46-71、2009、無

⑱渡邊欣雄、「市場経済化する中国文化」『ANTENNA』、90 号、9、2009、無

⑲渡邊欣雄、「続・風水師と裏の市場経済―その 2 風水の市場経済・事例篇―」『民俗文化研究』、9 号、106－111、2009、有

⑳池上良正、「葬式仏教から死者供養仏教へ」『宗報』浄土宗、1075 号、56-78、2009、無

㉑池上良正、「東アジアの救済システムとしての死者供養」『宗教研究』、359 号、182-183、2009、有

㉒志賀市子、「中国広東省潮汕地域の善堂―善挙と救劫論を中心に」『茨城キリスト教大学紀要』、42、41-60、2009、無

〔学会発表〕（計５件）

①志賀市子、「近代潮汕善堂的興起与大峰祖師信仰」近代民間組織与社会救済国際学術研討会、2011 年 10 月 29 日～30 日、山東大学歴史系

②黄強、「日本薩満文化研究的概況和趨向－以日本学者対薩満憑霊信仰研究為中心－」中国吉林第二届薩満文化研究論壇、2011 年 9 月 3 日～5 日、吉林省薩満文化協会

③池上良正、「無遮と無主」日本宗教学会第

70 回学術大会、2011 年 9 月 2 日～4 日、関西学院大学
④池上良正、「救済システムとしての「死者供養」の現況」日本宗教学会第 69 回学術大会、2010 年 9 月 3 日～5 日、東洋大学
⑤志賀市子、「中国粤東地域における無縁の死者祭祀の諸相」関西大学アジア文化交流研究センター第 12 回研究集会、2008 年 12 月 6 日、関西大学
〔図書〕（計３件）
①池上良正、佼成出版社「民俗と仏教―「葬式仏教」から「死者供養仏教」へ―」新アジア仏教史 15『現代仏教の可能性』、55-84、2011
②黄強、「日本薩満信仰研究述評」『域外薩満学文集』、学苑出版社、366-388、2010
③志賀市子、「中国粤東地域における無縁の死者祭祀にみる変化と持続―海陸豊の「聖人公媽」祭祀を中心に」鈴木正崇編『東アジアにおける宗教文化の再構築』、風響社、21-56、2010

６．研究組織
(1)研究代表者
佐々木　伸一（SASAKI　SHINICHI）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：３０１７５３７７

(2)研究分担者
渡邊　欣雄（WATANABE　YOSHIO）
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：９０１０３２０９

池上　良正（IKEGAMI YOSHIMASA）
駒澤大学・総合教育研究部・教授
研究者番号：６０１２２９２５

黄　強（KOU KYOU）
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：９０３２９６７３

志賀　市子（SHIGA ICHIKO）
茨城キリスト教大学・文学部・教授
研究者番号：２０２９５６２９

(3)研究協力者
河合　洋尚（KAWAI HIRONAO）
国立民族学博物館・機関研究員
研究者番号：３０６２６３１２

曹　建南（SOU KENNAN）
国立民族学博物館・外国人研究員